

いる事実をどう考えたらいいいのか。アナキズムは一般には国家権力の強制を否定して個人の自由意志による社会におきかえようとする社会思想である。その基本的パトスは自由であり、出発点は個人である。それは自由主義の論理の極限化といえる。思想というものが一般に虚構であるとすれば、アナキズムは虚構も虚構、「偉大な」虚構というべきかもしれない。この大虚構を信じたバクーニンは「聖なる」狂気につかれた思想家であり、革命家であったのではないか、そんなふうに私には思えてならぬ。日本の現代の精神状況のなかには狂気がある。美しい狂気、醜悪なる狂気、あるいは猥雑な狂気、聖なる狂気。革命宗派の異端として傍流にあったバクーニンの「復権」はあるいはこの「狂気」の所産かもしれない。

「アナキズム叢書」第1巻『バクーニン』1970年、三一書房、850円

（岩間 徹）

朝鮮近代史に関する諸研究

従来の東洋史研究の分野では、もっとも遅れていた一つである朝鮮史——ことに近代史の研究が、最近漸く活発になったことは本当に喜ばしい次第である。但し、我々が朝鮮近代史を考える場合、そこに日本の朝鮮侵略と、その植民地化という厳然たる事実とに逢着せざるをえない。近代日本＝帝国主義日本は、朝鮮の犠牲の上に成立したのである。日本の朝鮮研究者は、朝鮮近代史を主として日本帝国主義の朝鮮侵略史として研究してきた。然しそれでは「近代日本の対朝鮮関係史」に解消してしまうのではないか。たとえば、朝鮮と日本、あるいは諸列強との関係を考察するとしても、「確固たる民族的伝統をふまえた朝鮮人民の歴史的営み」＝帝国主義の侵略に抗し、反封建闘争を展開した朝鮮人民の活動の上に立ってこそ、「朝鮮」近代史がはじめて成り立つのではなからうか。このような研究視角を明確に、早くから打ち出したのは在日朝鮮人歴史家たちであった——それは当然のことかも知

れないが。

最近の朝鮮人歴史家の代表作として、姜在彦『朝鮮近代史研究』（日本評論社，A5判471ページ，3,000円）をあげることができよう。姜氏は本書で「資本主義列強が鎖国朝鮮に接近しはじめた前後の時期から，1910年日本の植民地に転化していった時期」までの「主要な政治的事変の歴史的性質を集約的に分析し，その深層に流れる思想との内的関連を究明する」ことを意図している。第1章「実学思想の形成と展開」では，近代朝鮮における開化思想が，17世紀中葉以降に形成された実学思想における「実事求是」の精神を核にして形成されたことを解明している。第2章「開化思想・開化派・甲申事変」では，1884年の金玉均ら開化派によって企てられた甲申事変に，思想的アプローチを試みている。姜氏は甲申事変が日本と結託した封建的な政権奪取の謀略だとする通説を排し，すでに開化思想を摂取していた金玉均らが，新しい世界史の発展に対応するため敢行した朝鮮社会発展の合法的なブルジョア改革運動であったと強調する。第3章「封建体制解体期の甲午農民戦争」では，これを宗教的・排外的な＜匪乱＞とする俗説を批判し，農民戦争の起った社会経済的分析，東学思想およびその組織の問題，農民戦争の展開過程と弊政改革，とりわけ従来不明確であった農民軍再起とその後の過程（武装闘争の持久戦化）を究明している。第4章「反日義兵運動の歴史的展開」では，戦前＜日韓併合＞を朝鮮側からの「自発的」要求に基づいた結果として，日本の植民地支配を隠蔽しようとした欺瞞的通説を批判し，その通説のために抹殺されてきた反日義兵運動についての事実を掘り起している。而して義兵運動と衛正斥邪（正統をまもり異端を斥ける）思想との関連に言及している。第5章「大陸浪人におけるアジア主義と朝鮮問題」では，＜日韓併合＞の推進に暗躍した内田良平の思想と行動を分析して，いわゆる＜アジア主義＞の連帯が，実は日本帝国主義の侵略の仮面であったことを告発する。以上の如き内容をもつ本書は，朝鮮近代における反侵略・反封建闘争の主体となった朝鮮人民の歴史的営みを掘り起したもので，朝鮮近代史の研究に大きな寄与をしたものといえよう。

朝鮮が日本の植民地化した時期を扱ったものに、山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』（岩波新書、228ページ、150円）がある。本書は山辺氏の前著『日韓併合小史』（岩波新書）の後をうけて、朝鮮総督府時代の植民地朝鮮の実態を究明しようとしたもので、36年間（1910～1945）にわたる日本帝国主義の抑圧下における朝鮮人民の姿、彼らの反抗・闘争を描いている。〈三・一運動〉や〈光州学生事件〉の条に、彼らの抗日闘争の現実を具体的によみとることができるが、全体としては日本側からの朝鮮侵略という視角の叙述に終っている。山辺氏自身もいわれるように「近い将来、本書で十分にあつかえなかった朝鮮独立運動史をまとめ」てほしいものである。

徐大肅著・金進訳『朝鮮共產主義運動史』（コリア評論社、A5判388ページ、1,500円）も注目に価する研究であろう。著者の徐氏は1931年咸鏡北道に生れ、46年南朝鮮に逃れ、ソウル中学を卒業後、アメリカに留学、コロンビア大学で哲学博士の学位をとり、現在ヒューストン大学副教授の職にある。このような徐氏の経歴からみて、朝鮮民主主義人民共和国に対して強い憎悪心を持つのは当然かも知れないが、本書の叙述は1945年に至るまでは比較的冷静で、ほぼ客観的であり、かつ豊富な資料に裏付けられているので、裨益される点も多い。徐氏は朝鮮共產主義運動を次のような5期に分類している。

- I 国外における運動の始まり（1891～1920）
- II 朝鮮における闘争（1920～1928）
- III 共産党自立の終焉（1928～1931）
- IV 外国共産党の下で（1931～1945）
- V 金日成の台頭（1945～）

第5期の叙述では、徐氏の烈しい政治的立場が出ているように思われる。「北朝鮮の共產主義者たちは、過去における朝鮮共產主義革命運動と無縁である」ときめつけ、戦前と戦後の運動の「鋭い断絶」を強調する。而して金日成を中心とする朝鮮の共產主義指導者は「朝鮮における共產主義の起源について、誰もが知っている事柄を無視して、彼らが朝鮮近代史において中心

的な役割を演じ、金日成の賢明な指導に委ねられた数十年の闘争の後、政権の座についたのだと主張する」、これは「歴史的事実には一致しない」として、厳しく非難している。この第5部については、読者の賢明な配慮が必要であろう。

呉知泳著・梶村秀樹訳『東学史』（平凡社、東洋文庫、378ページ、600円）も、我々にとっと貴重な収穫である。本書は太平洋戦争の始まる前年、ソウルで朝鮮語によって書かれたものである。当時の日本帝国主義による皇民化政策＝朝鮮語抹殺政策という困難な条件の下でかかれた、本書の意義は大きい。著者呉知泳は1890年代から一貫して東学運動の中におり、教団内外の問題に対して明確な主張と行動を示しつつけた人物だという。このような著者によって書かれた東学運動の歴史は、内側から朝鮮人民の反侵略闘争を描いたものであり、我々に強く訴えかけるものをもっている。

（山根 幸夫）

佐藤 進一 著

増訂 鎌倉幕府守護制度の研究

佐藤進一氏が、鎌倉幕府政治組織の一環たる守護制度の研究として、“第一段階”の各国守護沿革考証に着手され、その成果の一部を「光明寺残篇小考」（史学雑誌52巻7号）として発表されたのは、昭和16年のことである。その後、4年余の在外軍務から解放された氏が、学界に復帰するに当って世に問われたのが、上記の考証を全国的規模で行なった『鎌倉幕府守護制度の研究―諸国守護沿革考証篇―』（昭和23年要書房刊）であった。爾来20年にして、その増訂版が公刊せられた。

旧著は日本国66国2島の各国別に、守護の設置、不設置、在職者・在職年次の考定を意図したものであるが、その結果、(1)幕府政治史上、源頼朝時代の守護の設置と公家側の反撃による停廃、承久の乱による武家権力の伸長、